

漁をしている時の祖父の写真は、どれもタオルを頭に巻いていた。いつもだ。昔から変わらない。最後の漁に出たおとといもそうだった。出かける前に庭のほうに回る。漁の道具をしまった納屋の脇に、針金を渡した物干し台がある。昨日のうちに干しておいたタオルをそこから取って、キュツと頭に巻き付けて、「ほな行ってくるけん。」と港へ向かう。漁を終え、魚市場に魚を卸し、仲間と軽く一杯やっつてから家に帰ってくると、頭からはずしたタオルを水洗いして、物干し台の針金に掛ける。ずっとそうだった。毎日毎日、それを繰り返していた。

「ほら、この頃はまだお父さんの雰囲気、あんまり漁師らしくないだろ。」

「……はい。」

「漁師を継ぐのは嫌だ嫌だつて、俺と酒を飲むと文句ばかり言ってたんだ。」

「そうなんですか？」

「今は、生まれつきの漁師です、って顔してるけどな。」

シライさんはおかしように笑った。

グラビアの撮影の仕事は一週間ほどだったが、家に泊まり込んでの取材を続けたおかげで、祖父や父とすっかり仲よくなった。

「仲よくなったっていつても、俺は東京だから、年賀状のやりとりぐらいしかでき

なくて、おじいさんが生きてるうちにもう一度会って写真を撮りたかったんだけど……。でも、昨日ハジメさんから連絡もらってうれしかったし、けっこうスケジュールはキツかったんだけど、ボクに会えたから、やっぱり来てよかったなあ、って。」

シライさんはバッグから別の封筒を取り出して、中に入っていたはがきを「特別に見せてやるよ。」と少年の前に置いた。

年賀状だった。差出人は祖父。印刷された文面の横に、**手書きの一文**が添えられていた。

〈愚息もようやく一丁前になり、孫もこの四月で六年生です。**三代で船に乗れたらうれしいことです。**〉

祖父の字だ。まちがいない、これはおじいちゃんの字だった。

「ボクは大きくなったら、何になりたいんだ？」

てれくさかったが、正直に「丁リーガー。」と答えた。シライさんは「そうか、じゃあもつとたくさん食べて、もつと大きくならないとな。」と笑ってくれた。

④ 日が落ちてから、少年はシライさんと二人で家に戻った。

家に戻った7からの場面

卸

掛

雰

繼

8 雰囲気

絡

愚

7 文面

寂しい、悲しい、思い、強まる一つの理由